

序論)

みなさん、心と体どっちが大切でしょうか？

「どっちも大切だ！」というのが、みなさんの答えだと思いますけど、でも色々な場面で心を優先することがあるのではないのでしょうか。例えば、賛美をするとき「下手でも心がこもっていれば大丈夫だから」とか、献金をするとき「僅かなお金でも心がこもっていれば大丈夫だから」とか、証しや伝道をするとき「言葉が不十分でも、心がこもっていれば伝わるから」とか、そのように言って実際の言動よりは、心の方が大事。という言い方をすることが多いと思います。

「心が大切」というのは、ある意味では正しいと言えます。Ⅰサムエル 16章 7節には「人はうわべを見るが、【主】は心を見る」と断言されています。また、イエス様も僅かな献金をささげたやもめを、誰よりも多く捧げた人として評価され、さらには人を汚すものは表面的な行いではなく、人の内側からでてくるものだと言われました。ですから、私たち信仰者にとって心を重要視するのはとても大切なことだと思います。

では、みなさん。心が大切だからからだのことはどうでもいいと言えるのでしょうか。いいえ、どうでもよくはありません。心も大切だけでも、その心が入れられている私たちのからだも、上手に用いていかなければいけません。

今日は、私たちのからだをどのように用いていかなければいけないのか。ということのみことばから教えられていきたいと思います。

前提) コリント教会の人々の状況

今日の箇所はコリント教会が抱えていた 4 つ目の問題を取り上げている箇所となっています。今まで私たちはコリント教会には派閥問題、罪を放置する問題、そして、教会員同士が互いに訴え合っているという問題があったことを見ました。

今日の箇所では取り上げられている問題は、教会の中に性的罪を犯している人たちがいたという問題です。罪を放置する問題のところ、コリント教会にはお父さんの妻を自分のものにしているという、とっても大きな罪を犯している人がいたということを見ましたが、性的罪を犯しているのはどうもその人だけではなかったようです。以前もお話したようにコリントという街自体が非常に性的にみだれていた街でした。偶像の神殿には神殿娼婦たちがいて、コリント人たちは日常的にその娼婦を買って性的罪を犯していたのです。そして、その風潮がコリント教会の中にも浸透していて、教会員の中にもそのように性を売り物にしている女性を買って、性行

為に及んでしまっていた人たちがいたようなのです。

1) 私たちのからだは主（神様）のもの

では、なぜその人たちはそのような性的罪を犯してしまっていたのでしょうか。それは彼らが「自分たちはイエス様によって救われたのだから、何をしても許される」と開き直っていたからです。

みなさん、私たちは「何をしても許される」のでしょうか？ 確かに私たちは何をしても赦されます。それはイエス様が私たちのすべての罪を背負って十字架にかかってくださったからです。では、何をしても赦されるからといって、欲望のままに生きていいのか？ というとそうではありません。

聖書は決して、欲望に促されるままに好き勝手にこのからだを用いて良いとはいわないのです。12 節を読んでみましょう。

6:12 「すべてのことが私には許されている」と言いますが、すべてが益になるわけではありません。「すべてのことが私には許されている」と言いますが、私はどんなことにも支配されはしません。

みなさん、私たちは主イエスキリストによってすべての罪が赦される者となっています。そういう意味ではコリント教会の人たちが言っていたように「すべてのことが私には許されている」といえます。でも、だからといって何をしてもいいとはいえないのです。

例え結果として罪が赦されるとしても、この世のすべてのことが益になるわけではないし、そもそも、私たちはもはや欲望に支配されて生きる存在ではありません。みなさん、ここでいう「益」ということばは、いわゆる自分、個人の益というよりは、誰かと共有する益、誰かの役に立つ益、という意味合いが強いことばです。「益」はギリシャ語で「シュンフェレイ」といいます。このシュンフェレイということばは、「共に」とか「一緒に」を意味する「シュン」というギリシャ語と「運ぶ」とか「生み出す」という意味を持つ「フェロー」という言葉が組み合わさった言葉です。だから、シュンフェレイの元の意味としては「共に運ぶ」「共に生み出す」という意味です。私たちキリスト者は、自分の益だけを求めて生きていくのではなく、主にある教会にどのように益をもたらすのか、共に歩んでいる家族や周りの人とどのような益を共有するのか。そういうことを考えて歩いていくものなのです。（12 節表示）

でも、コリント教会の人たちは、欲望に支配されるまま自分の快樂だけを求めて

性的罪を犯していました。これも大きな間違いなんです。なぜなら、私たちに与えられた許可というのは、欲望に支配されるままに振る舞う自由ではなくて、その欲望からも解放されて、【主】のため、神様のためにこのからだを用いていく自由だからです。13 節を読みましょう。

6:13 「食物は腹のためにあり、腹は食物のためにある」と言いますが、神は、そのどちらも滅ぼされます。からだは淫らな行いのためではなく、主のためにあり、主はからだのためにおられるのです。

ちょっと、わかりにくい箇所ですね。「食物は腹のためにあり、腹は食物のためにある」というのは、当時の人たちが性的罪を犯す言い訳としてよく使われていたことばです。

要は、「お腹が減って食べ物を食べるのは、人の本能であり、自然なことで、お腹は、人の食欲を満たすためにあるでしょ。それと同じように、性的な欲求も人の本能であり、自然なことであって、それを満たすためにこのからだがあるのだから、からだを性的に使うことは、極自然なことであって、何も悪いことではないよ」と、罪を犯していた人たちは主張していたのです。

でも、パウロは「それは違う」と否定しています。私たちのからだは、淫らな行いをするためではなくって、「主のためにあるのだ。そして、そのために【主】も御業をなされたのだ」そうパウロは主張しています。13 節後半の「主はからだのためにおられる」というのは、「私たちが【主】のために生きようになるために、主ご自身が御業をなしてくださった」ということです。

そして、その【主】がなしてくださった御業というのが 14 節。

6:14 神は主をよみがえらしましたが、その御力によって私たちも、よみがえらせてくださいます。

つまり、「私たちが【主】のために生きることができるようになるために、神様はイエス様をよみがえらせてくださり、私たちもよみがえらせて、新しい存在にしてください」のです。

みなさん、私たちは、神様のために生きられるようになるために、キリストの復活という恵みを与えられているのです。決して欲に支配され、その欲を満足させるために、罪の赦しを受けたわけではないのです。

みなさん、私も食欲に弱いものですが、この世で私たちを支配している欲というものは滅ぼされるものなのです。13 節に『「食物は腹のためにあり、腹は食物のためにある」と言いますが、神は、そのどちらも滅ぼされます。』と書いていますが、欲に支配される人生というのは、この世の一時的な期間でしかないのです。

やがてくる永遠の世界においては、私たちを支配する欲自体が滅ぼされて、喜んで【主】のために生きることができる本当の自由を味わう事になるのです。だからこそ、この世にあって私たちは、このからだを欲の支配の中におくのではなく、【主】のご支配の中、神様のご支配の中におくことが大切なのです。

【主】はそのために、私たちの罪を十字架で殺し、神の子として私たちをよみがえらせてくださいました。だから、わたしたちのからだは【主】のものであり、神様のものなのです。

2) 私たちのからだはキリストのからだの一部

次にパウロは、私たちのからだは「キリストのからだの一部なのです」と言っています。15 節を読みましょう。

6:15 あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだはキリストのからだの一部なのです。それなのに、キリストのからだの一部を取って、遊女のからだの一部とするのですか。そんなことがあってはなりません。

ここで「あなたがたのからだはキリストのからだです」と言わず、「あなたがたのからだはキリストのからだの一部なのです」と言っているのは、キリストのからだは、教会全体で構成されるものだからです。

私たちはキリストのからだの一部です。でも、例え一部であったとしても、キリストのからだを遊女に明け渡すということはあってはならないことです。

なぜならば、性的つながりというのは、ただ快楽を経験して終わりではなく、相手と完全に一つになる行為だからです。みなさん、この一つになるというのは、紙と紙をのりでくっつけて一つにする行為と似ています。みなさん、紙と紙をのりでくっつけたらどうなりますか？ それを切り離そうとしても決してきれいには切りはなせません。一つになった紙を無理やり切り離したら、両方がボロボロになる

か、どこか欠けたものになってしまいます。性行為というのは本来そういうものなのです。

私たちは、一つになる存在を選ばなければいけません。私たちが一つになる対象として選ぶべき存在は、快楽を満たすだけの相手ではなく、【主】によって一つになるべき存在であり、【主】御自身なのです。だから、パウロは遊女と交わってはいけません。というだけではなく、17 節のように言っています。

6:17 しかし、主と交わる者は、主と一つの霊になるのです。

みなさん、コリント教会の人たちはどうもグノーシス主義という考え方に影響されていたようです。グノーシス主義というのは特別な知恵を持っている者が救われるとか、一つ上の人生を歩めるとか、そういう考え方なんですけど。そのグノーシス主義の考え方の中には、人は肉と霊で構成されていて、肉の方はいずれ捨てる物で、大切なのは霊なんだ。という考え方がありました。

だから、コリント教会の中には、「霊はキリストによって救われたのだから、この肉体は、欲望のままに自由にしてもいいじゃない」と考える人がいたのです。

だから、パウロは「主と一つになる」ではなく、「主と一つの霊になる」という言い方をして、「あなたたちが大切にしている霊、その霊を主と一つにするためには、遊女と交わるのではなく、主と交わることが大切なのだ」と言っています。

みなさん、ここでいう「主と交わる」というのは、ただお祈りをして、みことばを聞くだけじゃないですよ。主とのりでくっついたように一つとなって、主と共に実際に歩いていくということです。もっと言うと主のみ心を実現するために、そのからだを用いていくということです。

「主と一体となって生きていく」。それが主と交わるということであり、「主の霊と一つになる」ということです。

対して、性的な罪を犯していくというはどういうことでしょうか。それはキリストのからだを汚す罪です。だから、パウロは繰り返し「淫らな行いを避けなさい」と述べています。18 節を読みましょう。

6:18 淫らな行いを避けなさい。人が犯す罪はすべて、からだの外のものです。しかし、淫らなことを行う者は、自分のからだに対して罪を犯すのです。

みなさん、わたしたちのからだはキリストのからだの一部です。だからこそ、性的罪によってキリストの体を汚すのではなく、むしろ、主と一つになってこのからだを使い、主の霊と一つになっていく歩みをしましょう。

3) 私たちのからだは聖霊の宮

そして、最後、パウロは私たちのからだは「聖霊の宮である」といっています。19節を読みましょう。

6:19 あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではありません。

私たちのからだは「聖霊の宮」です。この宮というのは、ギリシャ語でナオスといい、この言葉は以前も説明した通り、神殿の中でも一番置くにある至聖所のことを指しています。至聖所とは、もっとも聖なる所であり、神様の臨在があふれるところです。

実は神殿を指すギリシャ語は、ナオスの他にヒエロンということばもあります。しかし、ヒエロンは神殿全体を指す言葉です。だから、パウロはあえて至聖所を指すナオスということばを使って、私たちのからだは聖霊の至聖所であることを強調していることがわかります。

みなさん、私たちのからだは聖霊が住むもっとも聖なる所なのです。

そして、聖なる所というのは、他のすべてのものから切り離される所という意味でもあります。だから、パウロは「あなたがたはもはや自分自身のものではありません。」というのです。

みなさん、私たちのこのからだは、もはや私たちの所有物ではありません。むしろ、わたしたちの所有から切り離されて、聖霊様が住むもっとも聖なる所として性別されているのです。

そして、そのために主はキリストのいのちという代価を払って、私たちを買い取られました。

だから、私たちはこのからだをどのように用いるべきなのかというと、神様の栄光を現すために用いるべきなのです。20節の通りですね。

6:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから、自分のからだ

をもって神の栄光を現しなさい。

結論)

みなさん、私たちのからだは誰のものでしょうか？（最後の PPT）

私たちのからだは主のものであり、父なる神様のものです。主はそのためにキリストを復活させ、その力によって私たちをよみがえらせてくださいました。だから、私たちは神様のためにこの体を用いていかなければいけません。

そして、2 番目に、私たちのからだは、キリストのからだの一部です。そして性行為は完全に一つとなることを意味しています。だからこそ、私たちはこのからだを遊女と交わるためではなく、主と一つになるために用いていくべきなのです。

そして、最後、私たちのからだはもっとも聖別された聖霊の宮です。もはやこのからだの所有権は、わたしたちから切り離され、聖霊のものとされています。

主はそのためにイエスキリストという代価を払われました。

だからこそ、私たちはこのからだをもって神様の栄光をあらわしていきたいと思えます。みなさんは、そのからだは今までどのように用いてこられたでしょうか？そして、これからはどのように用いられるでしょうか？

今日のメッセージを振り返って、今、暫くの間、みことばに対する応答を黙想するときを持ちましょう。自分のからだの用い方を振り返り、悔い改めるところがあれば主の前に悔い改めましょう。そして、主の栄光を現すために、今週このからだをどのように用いるのが、主のみ心に沿うのか、聖霊の導きを求めつつ考えてみましょう。